

ミルトンの英雄観—その三¹

—ソネットと後期の作品—

野呂有子

I

ジョンソン博士(1709-84)は、ミルトンのソネットについて感想を求められて、「ミルトンは、大岩から巨像を彫り出す才にはたけていたが、貝のおもてに胸像を刻み込むことはできなかった。」と述べたという。また、『英国詩人伝』の中でも、「ソネットについては何ら批評する価値はない。最上の出来のものですら、それ程悪くないという程度にすぎない。……ソネットの構造を、イタリア語のそれに適合させてみようととしても、我々の母国語ではうまくいったためしはない。英語は〔イタリア語より〕はるかに語尾の変化に富んでいるから、脚韻をしばしば変える必要がある。」²と述べている。ジョンソン博士が、ミルトンのソネットの技法と後期の大作との関係や、ソネット自体の作品としての価値も殆ど認めていないのは明らかだと言えよう。

しかし、18世紀のこの文壇の大御所の言葉にもかかわらず、ミルトンのソネット——特に1640年代以降のソネット——の中にその独自性と完成度の高さを認め、更に後期の大作との関連性を見ていこうとするのが、昨今のミルトン研究の動向といえよう。本稿では、1640年代以降数編のソネット(いわゆる‘heroic sonnets’三篇を含めて)を通じてミルトンの英雄観が深化していく過程、更にはそれが後期の大作の中でどのように展開されていくかを見ていこう。

ミルトンの英雄観という時に念頭におかなくてはならないのは、それが「キリスト教的な英雄観」だということだ。その内容を明らかにしてゆくために、それ以前の英雄の型に特徴的である「武力」というものが、ミルトンにおいてはどのように扱われているかという事に焦点を絞って論を進めていきたい。

¹本稿は、1982年1月に行われた十七世紀英文学会での発表に加筆訂正修正を施したものである。

²ミルトンがソネットの形式として Petrarchan sonnet を採用していることにふれている。

II

1640年代の初めに書かれたと考えられている「ソネット・第8番」を見てみよう。

Captain or Colonel, or Knights in Arms,
Whose chance on these defenseless doers may cease.
If deed of honour did thee ever please,
Guard them, and him within protect from harms,
He can requite thee, for he knows the charms
That call Fame on such gentle acts as these,
And he can spread thy Name o're Lands and Seas,
What ever clime the Sun's bright circle warms.
Lift not spear against the Muses Bowre,
The great Emathian Conqueror bid spare
The house of Pindarus, when Temple and Towre
Went to the ground: And the repeated air
Of sad Electra's Poet had the power
To save th'Athenian Walls from ruine bare.

指揮官どの、隊長どの、いや甲冑の騎士どの
防備なきこの戸口を奪取なさるやも知れぬかたよ、
もしまことに榮譽の行為を望まれるならば
この戸に立ちただかり、なかのものを守りたまえ。
かのもは報恩の道を知る。彼を誦し、かかる
優しき行動に名声を指しむけることになろう。
そして輝ける陽が暖め巡るところなら、あまねく、
海と陸との分かちなく、貴下の名をひろめようぞ。
ゆめ、槍を向けたもうな、詩女神らのすみかに。
偉大なるエマティアの征服者は、塔堂破壊の
時にさえ、命じたのだ—ピンダロスの邸は

野呂有子 「ミルトンの英雄観 その3 —ソネットと後期の作品—」『東京成徳短期大学紀要』第16号(1983)23-32.

残せ、と。悲しきエレクトラをうたった詩人の
ユーラスには、それを繰り返しかえし吟じたときに、
アテナイの城壁を壊滅から救う力があったのだ。³

このソネットは、王党派の武将に対する呼びかけの形をとりながら、ミルトン自身をも詩人ピンダロスや悲劇詩人エウリピデスにも比する高みにまで押し上げるという、まったく人をくった形になっている。詩人が、アレクサンダー大王(356-323 B.C.)やライサンダーの雅量の徳を賞めたたえつつ、武力の行使を押さえる力をもつものとして文学の世界を提示していることに注目したい。自分の住む家の「戸に立ちほだかり、なかのものを守」ることが「榮譽の行為」だとするミルトンは、敵方の武力に対し、より価値のあるものとして自分の属する文学の世界を対峙させているといえよう。

次にあげるソネットは、拙論「ミルトンの英雄観」で扱った「ソネット・第15番」(1648)である。⁴ 重複を承知でここに詩のみあえて全文引用する。

Of Colchester

Fairfax, whose name in arms through Europe Rings
Filling each mouth with envy, or with praise,
And all her jealous monarchs with amaze,
And rumours loud, that daunt remotest kings,
Thy firm unshaken virtue ever brings
Victory home, though new rebellions raise
Their Hydra heads, and the false North displays
Her broken league, to imp their serpent wings,
O yet a nobler task awaits thy hand;
For what can war, but endless war still breed,
Till truth, and right from violence be freed,
And public faith cleared from the shameful brand

³ 訳は、新井明「ミルトンのソネット演習」,(『英語青年』, CXXVII, No. 2, 1981年4月)による。

⁴ 『東京成徳短期大学紀要』第11号(1974年4月)。

Of public fraud. In vain doth valour bleed

While avarice, and rapine share the land.

武将フェアファックスの武勇をたたえつつ、九行目で「より崇高な使命があなたのその手を待っている」と詩人は言う。これは「『第二弁護論』 (*Defendio Secunda*, 1654) において展開される、「武力」(“force”)におとらず「説得力」(“persuasion”)を重視するという主張に繋がる思考様式である。」⁵ 五行目の‘thy firm unshaken virtue’は、ソネットの要^{かなめ}となるフレーズであるが、Smartが‘virtue’を‘the Latin sense of valour’の意として使われているとするのに対し、HonigmannやFinleyが‘moral virtue’の意味をあわせもつとする点で一致しているのは興味深い。⁶ これを形容する‘unshaken’の語は、既に拙論でもふれた通り、⁷ 用例は少いが『楽園の喪失』や『楽園の回復』で Christian heroism を規定する形容詞の一つとして使われることになる。

次に引用するのは『楽園の喪失』第4巻で新世界を前にして内省するサタンのセリフである。

O had his powerful destiny ordained

Me some inferior angel, I had stood

Then happy; no unbounded hope had raised

Ambition. Yet why not? Some other power

As great might have aspired, and me though mean

Drawn to his part; but other powers as great

Fell not, but stand *unshaken*, from within

Or from without, to all temptations armed.

(58-65)

‘unshaken’の語は、サタンのように御子に対する嫉妬にかられて、墮ちることのなか

⁵ 新井、同上、No. 4 (1981年7月), p.16.

⁶ John, S. Smart, *The Sonnets of John Milton* (Glasgow: Maclehouse, Jackson and Co., 1921), p. 74; E. A. J. Honigmann, *Milton's Sonnets* (London: Macmillan, 1966), p. 141; J. H. Finley, ‘Milton and Horace’, *Harvard Studies in Classical Philology*, XIVIII (1937), pp.41-59.

⁷ *Ibid.*, p. 38. 尚、引用中のイタリックは論者による。以下同様。

野呂有子 「ミルトンの英雄観 その3 —ソネットと後期の作品—」『東京成徳短期大学紀要』第16号(1983)23-32.

った天の3分の2の天使達を形容している。

又、第8巻では、サタンが天使の3分の1を引きつれ神に対して反逆しようとする中でただ1人、その言葉に惑わされず論陣を張り、サタンと訣別して神のもとへと帰ってくる熾天使アブディエルを形容する語としてでてくる。

So spake the seraph Abdiel faithful found,
Among the faithless, faithful only he;
Among innumerable false, unmoved,
Unshaken, unseduced, unterrified
His loyalty he kept, his love, his zeal;
Nor unnumbered, nor example with him wrought
To swerve from truth, or change his constant mind
Though single.

(896-903)

アブディエルについては、「武力と説得」の問題にからんで後で詳しく述べる。

更に『楽園の回復』第4巻では、サタンの弁舌巧みな誘惑を退け、サタンの起こした嵐の中で風雨にさらされて尚、心穏やかなキリストを形容している。

...ill wast thou shrouded then,
O patient Son of God, yet only stood'st
Unshaken; nor yet stayed the terror there,
Infernal ghosts, and hellish furies, round
Environed thee, some howled, some yelled, some shrieked,
Some bent at thee their fiery darts, while thou
Sat'st unappalled in calm and sinless peace.

(419-425)

このように見てくると、後期の作品でこの語は、「信仰に堅く立ち、弁舌たくみなサタンの誘惑にさらされてなお、それにうちかつ」という意味を内包していることが分かる。

野呂有子 「ミルトンの英雄観 その3 —ソネットと後期の作品—」『東京成徳短期大学紀要』第16号(1983)23-32.

「ソネット・第15番」でこの語がそれ程、明確な内容を伴っているとは断言しがたい。しかし、「より崇高な使命」の意味するところが議会内部の諸問題の解決ということであれば、これが「武力」によるものではなく「説得」に近い形のものとなることは当然察せられよう。

「ソネット・第15番」から4年後にかかれた「ソネット・第16番」では、信仰と武力の関係が明らかにされている。

To the Lord General Cromwell

Cromwell, our chief of men who through a cloud
Not of war only, but detractions rude,
Guided by faith and matchless fortitude,
To peace and truth thy glorious way hast ploughed,
And on the neck of crowned Fortune proud
Hast reared God's trophies and his work pursued,
While Darwen stream, with blood of Scots imbrued,
And Dunbar field resounds thy praise loud,
And Worcester's laureate wreath: yet much remains
To conquer still; Peace hath her victories
No less renowned than War: new foes arise,
Threatening to bind our souls with secular chains.
Help us to save free conscience from the paw
Of hireling wolves whose gospel is their maw.

詩の3行目 'Guided by faith and matchless fortitude' に注目したい。ちなみに Nardo 女史は 'fortitude' の語について 'as strength of will and external fortitude (as physical strength)' と考えている。⁸「武力」は単にそれのみで有効なのではなく、堅く信仰に基づいて使われる時にのみ実戦での勝利をもたらすことができるのだ。この考え方は、『樂園の喪失』第6巻381行から384行の「…力は真理と正義から離れては／称賛の価値はなく、汚名と恥辱

⁸ Anna K. Nardo, *Milton's Sonnets and the Ideal Community* (University of Nebraska Press, 1979), p. 118.

野呂有子 「ミルトンの英雄観 その3 —ソネットと後期の作品—」『東京成徳短期大学紀要』第16号(1983)23-32.

にあたいする／のみであるのに、かれらは [=サタンたち] 虚栄に駆られて／栄光を慕い、汚名を負っても名を求める」というラファエルの言葉に明らかである。

そして、このソネットでも hero に要求されるのは、平和時の務めである。2行目の ‘not of war only, but detractions rude’ にも見えるように、「武力」に秀でていただけでなく、口汚い中傷にも負けなかったクロムウェルであれば、「説得」を用いて問題の解決を計るのは難しいことではないはずだ、というのがミルトンの意図するところであろう。

このソネットと1ヵ月と間をあげずに書かれた「ソネット・第17番」では、hero はまさに「説得の人」として浮彫りにされていくのである。

To Sir Henry Vane the Younger

Vane, young in years, but in sage counsel old,
Than whom a better senator ne'er held
The helm of Rome, when gowns not arms repelled
The fierce Epirot and African bold.
Whether to settle peace or to unfold
The drift of hollow states, hard to be spelled,
Then to advise how war may best, upheld,
Move by her two main nerves, iron and gold
In all her equipage: besides to know
Both spiritual power and civil, what each means,
What servers each, thou hast learned, which few have done.
The bounds of either sword to thee we owe;
Therefore on thy firm hand Religion leans
In peace, and reckons thee her eldest son.

オランダとの戦争でのヴェインの功績が称えられてはいるものの、その称え方は「武勇の人」としてではなく「説得の人」としてのものである。1行目の ‘sage counsel old’、2行目の ‘senator’ しかり。3行目ではっきりと ‘gowns not arms repelled’ と言い切っている。更に5行目から6行目にかけて ‘settle peace or unfold / The drift...’ と続く。‘spell’ は Lockwood の *Lexicon* で ‘to make out point by point, to discover by careful study’ の意とあ

野呂有子 「ミルトンの英雄観 その3 —ソネットと後期の作品—」『東京成徳短期大学紀要』第16号(1983)23-32.

る。7行目から8行目では‘advise how war may best.../ Move...’という具合である。そして最後の2行で‘on thy firm hand Religion leans / In peace, and reckons thee her eldest son.’としめくくり、heroが堅く信仰に立った人物であることが強調されている。

さて、次にはこれから約3年後に書かれたミルトンのソネット中最高傑作の一つといわれる「ソネット・第18番」を見てみよう。

On the late Mssacher in Piemont

Avenge O Lord thy slaughter'd Saints, whose bones
Lie scatter'd on the Alpine mountains cold,
Ev'n them who kept thy truth so pure of old,
When all our Fathers worship't Stocks and Stones,
Forget not: in thy book record their groanes
Who were thy Sheep and in their antient Fold
Slain by the bloody Piemontese that roll'd
Mother with infant down the Rocks. Their moans
The Vales redoubl'd to the Hills, and they
To Heav'n. Their martyr'd blood and ashes sow
O're all th'Italian fields where still doth sway
The triple Tyrant: that from these may grow
A hunder'd-fold, who having leant thy way
Early may fly the Babylonian wo.

ピエモンテでおこった最近の大虐殺について

み裁きを、おお主よ、惨殺された聖徒たちのために。彼らの骨は
凍てつくアルプスの山々に散乱している。
われらの先祖たちが木と石を拝んだ昔から、
み教えの清らかな^{まこと}真理を守った人々を
お見捨てなきように。あなたの巻き物に彼らの呻きの声を記録なされよ。
善き羊として^{いにしえ}古からの囲いに安ずるものたちは
血に飢えたピエモンテ軍に屠られて、彼らは

赤子を抱いた母親を岩山から突き落とす。彼らの呻きの声を
谷々は倍加して山々へと響き亘らせ、山々は
それらを天へと反響させた。人々の殉教の血と亡きがらを種として、
イタリア全土に蒔かれよ。そこで今なお暴政を行うのは
三重冠の暴君。これらの種子から百倍もの者たちが
生え出てくるように、彼らは神の道を学んで、
早くも、かのバビロンの痛苦を遠ざけるように。⁹

ここに詠われる hero は、「武力」に抗すべくもない「赤子を抱いた母親」に代表される人々である。つまり、「武力」からは最も遠い存在といえよう。信仰に篤かったがゆえに受難に会う彼らの生き方は、そのまま「ひとつの『範例』として、ひとを説得するかたちのも」となっているのである。¹⁰

以上、五つのソネットの流れから、明確化し深化しているものとして次の三点をあげることができよう。

- (1) hero 像の条件として「武力」は必ずしも必要ないこと。
- (2) 堅く信仰にたつ人物であればこそ、その「武力」の行使も称えられること。
- (3) 「武力」以上に秀れた Christian heroism の核としての「説得力」ということ。

III

最近、ミルトンの後期の作品の中にソネットに近いまとまりを発掘する作業が進んでいる。例えば、Louise Martz は『闘技士サムソン』(1671)の結びのコーラスの言葉(II.1745-1758)は韻を踏んだ14行詩になっていると指摘しているし、Lee M. Johnson は『楽園の回復』(1671)には12、『闘技士サムソン』には6ほどの14行詩があるとしている。先に触れた Nardo 女史は、14行のものに限らず12行、13行、15行、また、それ以上のものなどに巾を広げ

⁹ 訳は、新井明訳(「英詩研究」,『英語教育』XVII, No. 4, [1968年7月])、及び、宮西光雄訳に学びつつ、一部手を加えた。

¹⁰ 新井「ミルトンのソネット演習」(『英語青年』, CXXVII, No. 3, p. 16).

てそれらを ‘embedded sonnet’ として考えている。¹¹

彼女が取り上げているものの中で、現在の議論に重要な関わりを持つてくるのは、『樂園の喪失』第6巻29行から43行までの「はめこみソネット」である。

Servant of God, well done, well hast thou fought
The better fight, who single hast maintained
Against revolted multitudes the cause
Of truth, in word mightier than they in arms;
And for the testimony of truth hast borne
Universal reproach, far worse to bear
Than violence: for this was all thy care
To stand approved in sight of God, though worlds
Judged thee, aided by this host of friends,
Back on thy foes more glorious to return
Than scorned thou didst depart, and to subdue
By force, who reason for their law refuse,
Right reason for their law, and for their king
Messiah, who by right of merit reigns.

“神のしもべよ、よくやってくれた。
よく戦ってくれた。反逆の^{よろず}千万を向こうに
まわして、^{まこと}単身、^{まこと}真理の道を守りぬいて
くれた。彼らの武器より強いことばで。
そして^{まこと}真理の^{あかし}証のために、暴逆よりも
堪えがたきひとみな^{よみ}の非難に、よくぞ
耐えてくれた。きみは、たとい全人がきみを
責めるとも、神のまえで^{よみ}嘉せられることを
のぞんだ。より易き勝利の道がいまや

¹¹ ‘Chorus and Characters in Samson Agonistes’, *Milton Studies*, I (1969), p. 133; ‘Milton’s Blank Verse Sonnets’, *Milton Studies*, V (1973), p. 130; *Ibid.*, pp. 158-178.

備えられている。さきには侮蔑を浴びせられた
敵に、ここに集える友軍とともに立ち向かい、
理性をおのが律法とし、正しき理性を
おのが律法とすることを拒むもの、
み子として治めるメシアをおのが王とする
ことを否むものどもを、力によって押さえよ”¹²

これは、神の軍勢が悪魔の軍団を迎え討つべく出撃の用意をしている所へ丁度戻ってきた熾天使アブディエルに対する神からの賞賛と激励のソネットである。

「かれらの武器より強いことばで」真理の戦いを戦い抜いた功績をまず前半で称え、その後で「武力」による「より易き勝利への道」へと進むことを促すこの神の言葉は、「ソネット・第15番」や「第16番」とは丁度逆の構造になっている。‘the easier conquest now / Remains thee…’という言葉使いも、「ソネット・第15番」の‘a nobler task awaits thy hand’や「ソネット・第16番」の‘yet much remains / To conquer still’に呼応する。

「武力」による戦いよりも「ことば」による戦いを「より崇高な」ものとするミルトンの主張がここに余す所なくあらわれている。神の言葉に励まされて戦場におもむいたアブディエルは、サタンを見て次のように考える。

O heaven! That such resemblance of the highest
Should yet remain, where faith and reality
Remain not; wherefore should not strength and might
There fail where virtue fails, or weakest prove
Where boldest; though to sight unconquerable?
His puissance, trusting in the almighty's aid,
I mean to try, whose reason I have tried
Unsound and false; nor is it aught but just,
That he who in debate of truth hath won,

¹²訳は、新井明『ミルトン 楽園の喪失』(大修館書店、1978)から採用。以下『楽園の喪失』の訳はすべてこの書による。尚、引用中、日本語のものに付加された行数は同訳書の行数を示す。

Should in arms, in both disputes alike
Victor; though brutish that contest and foul,
When reason hath to deal with force, yet so
Most reason is that reason overcome.

(114-126)

“ああ天よ！信仰も真実も残ってさえ
いないのに、このように至高者^{いとたかきもの}への似姿が
残るとは！徳もないくせに、どうして
勢力^{ちから}がありうるのか？大胆ではあり、無敵と
みえようと、力弱くはならぬのか？
全能者の加護を信じて、こいつの力を
ためしてやろう。こいつの理屈を不健全にして
虚偽なることは、すでにあばいた。真理の論争に
勝ったものが、武力においても勝つこと、
いずれの争いにも勝つことは、当然なりと
言うほかはない。理性が力と争うとき、
その争いが獸的できたなかろうと、
理性が勝つのが、道理というものだ”

そして、自信に満ちてサタンに挑み、機先を制してその兜に一撃を加える。サタンは「十足大きく／後に退き、十歩目は膝を折って／巨大な槍で」身体を支えねばならぬほどの打撃を受ける。

サタン側の登場人物の言葉にも「ソネット・第16番」と非常によく似た構造を持つものがある。第1巻の冒頭で地獄の火の海に臥すサタンに向かって「大胆なる同輩^{とも}」ベルゼバブが発する言葉がそれだ。彼のセリフは全体でソネットを二つ分重ねた28行の長さになっている。

O prince, O chief of many throned powers,
That led the embattled seraphim to war

Under thy conduct, and in dreadful deeds
Fearless, endangered heaven's perpetual king;
And put to proof hid high supremacy,
Whether upheld by strength, or chance, or fate,
Too well I see and rue the dire event,
That with sad overthrow and foul defeat
Hath lost us heaven, and this mighty host
In horrible destruction laid thus low,
As far as gods and heavenly essences
Can perish: for the mind and spirit remains
Invincible, and vigour soon returns,
Though all our glory extinct, and happy state
Here swallowed up in endless misery.
But what if he our conqueror, (whom I now
Of force believe Almighty, since no less
Than such could have o'erpowered such force as ours)
Have left us this our spirit and strength entire
Strongly to suffer and support our pains,
That we may so suffice his vengeful ire,
Or do him mightier service as his thralls
By right of war, whate'er his business be
Here in the heart of heart of hell to work in fire,
Or do his errands in the gloomy deep;
What can it then avail though yet we feel
Strength undiminished, or eternal being
To undergo eternal punishment?

(128-155)

「王よ、御座^{みくら}に座する〈威力〉たちの長よ、
閣下は、セラフの陣容をととのえて戦闘へと

導き、はばかりとなく烈しい行動におよび、
天の永遠の王を危機におとし入れて、
その主権を支えるものが、彼の実力なのか、
偶然なのか、^{きだめ}運命なのかをためした。
だが恐ろしい結果を眼前にして、悔いる。
悲しい^い転覆と忌まわしい敗北を喫して
天国を失い、この強力な軍勢は
いま、このような壊滅に、ただ呻吟する。
ただし天使たちと天の霊質に滅び果てる
ことはない。心と霊は征服されることを
拒絶し、生气はただちに立ちもどる。
たとい、わしらの栄光が消失し、至福が
果てなき悲惨に呑みこまれようと。
わしらを征服したもの、(そいつをいまは
全能と考えざるをえない。全能者でなけりや
わしらの力を打倒することなどできなかったろう。)
そいつが、わしらの霊と力を^{そこ}損なわずに、わざと
この苦しみを味わわせようとする腹なのか。
そうなれば、復讐の怒りをまともに食らい、
この逆まく地獄の火のさなかで、あいつは
なにをしたいのかは知らないが、こちらは
敗けたのだから、奴隷として仕えるか、それとも
暗い^{ふち}淵のなかでやつの使い走りをするようになる。
わしらの力は不滅、存在は永遠だとしても、
永遠の刑罰を受けるためだとするならば、
そんなものが、なんの役に立つというのか。」

まず相手にその名前や位で呼びかけ、それを同格で受け、それを主格の先行詞とする関

係代名詞説が続く、という文構造はもとより、¹³ ‘chief’ の語の使用、まず戦いで武功を称えるという内容も酷似している。また、サタンが ‘heaven’s perpetual king’ を危険に陥れたのに対し、クロムウェルは ‘earthly king’ を打倒したことになる。‘chance’ という語は ‘crowned fortune’ に通ずる。133 行目に見える ‘upheld’ は、「ソネット・第17番」に使われた語でもある。だが、このいさましげな高揚した調子も、134 行目で急激な変化を見せる。戦いに敗れて絶望にうちひしがれとまどい、神の真意をはかりかねる者の心情の吐露がそれに続く。高揚していると見えた冒頭の数行もよく見れば矛盾をはらんでいるといえよう。‘perpetual’ であれば ‘endanger’ ということはありえないはずなのだから。

¹⁴

さらに重要なことは、話者の神に対する認識の低さである。133 行目の ‘whether upheld by strength, or chance, or fate,’ という言葉から、ベルゼバブが神の本質を掴んでいないことが明らかになる。そして彼は、それを結局「武力」だと考えている(II. 143-145)。ちなみに Empson は ‘almighty’ の語はここでは単に ‘able to defeat only opposing combination in battle’ の意であるとしている。¹⁵ つまり、ベルゼバブは神をあくまでも単なる「武力」の範疇でしかとらえることができない。そして、これは一人ベルゼバブだけの問題ではない。大魔王サタンも同じ巻で「知力では劣っても、力では他を圧するやつ」(II. 247-248)と神を評している。堅く信仰に基づいた「武力」、「武力」に優越する「説得力」という考え方はサタンの側の人間にはまったく見出すことができない。このことは、第6巻820行から823行の御子の言葉—「かれらは力ですべてを量り、他の点での優越感は競わない、また関知しない。だから私もかれらとは、力あらず以外はせぬつもりぞ。」—に裏打ちされている。このシーンで御子は敵方に対しては一言も言葉を発さずに「万雷」を手におどりかかる。これまで『楽園の喪失』の戦いのシーンでは、実際に戦闘に入る前に必ずといってよいほど、ソネットの出だしを思わせる、敵方に対する呼びかけで始まる前口上があったのを思い合わせると、この御子のやり方は破格といえよう。このことについては後でもう少し詳しく述べることにする。

Robert French は『楽園の喪失』第1巻のサタンの言葉にソネット風の14行詩を指摘し、これを ‘mock sonnet’ と呼んでいる。又、Nardo 女史もサタンの言葉の中にソネットに近

¹³ ベルゼバブのセリフに限らず、『楽園の喪失』には、相手への呼びかけで始まる、ソネット風なものが非常に多い。

¹⁴ William Empson, *Milton's God* (Greenwood Press rpt. 1978), p.38.

¹⁵ *Ibid.*, p. 38.

いまとまりを見つけ、これを‘sonnet-parody’と言っている。¹⁶ 彼らの言い方にならえば、先に引用したベルゼバブの言葉は、不完全ながらもかなり意識的な脚韻が施されていて‘mock heroic sonnet’とでも呼べそうだ。脚韻のいくつかを指摘するならば、‘fate’と‘state’、‘entire’、‘ire’、‘fire’、かなり離れたところで‘powers’と‘ours’、‘event’と‘punishment’などがある。また、相手への呼びかけで始まり、その武功を称えるという形は紛れもなく‘heroic sonnet’の持つ形式であるといえよう。しかし、ベルゼバブの言葉には、矛盾があり、anti-climaxがあり、認識の低さがあらわれていることは既に指摘した。結局かれの言葉は賞賛としても説得の言葉としても体をなさない中途半端なものとなっている。

さて、ここでミルトンの言う「説得」の内容について一言付け加えておかななくてはならない。それが必ずしも雄弁や多弁をさすものでないことは明らかであろう。「ソネット・第18番」で詩人をつき動かし、神をも動かすことができるのは殉教者達の「呻き」であり、「嘆きの声」に他ならないとさえいえよう。どれだけ神の側に近く立ち、どれだけ堅い信仰を抱いているか、つまり揺るぎない信仰の表出として「説得」の語を考える必要がある。 「正しき理性」の表出と言ってもよい。

したがって、神に反逆するものが「説得の語調」(第2巻118行)だけを用いるとき、それは、必然的に強弁・詭弁となる。伏魔殿で悪魔たちの議論が展開される『樂園の喪失』第2巻は、さながら強弁のコンカティネーションの様を呈している。例えば、「耳を喜ばせる術に／長けた(II. 117-118)」ベリアルは「悪しき理由を善と強弁して、／議に熟達したもののたちの思いを混乱させ(II. 113-114)」、「ことばを理性にくるんで、(I.226)」まくしたてる。

そして、人類の母たるエヴァは「偽りに満ちた」(第9巻531行)蛇の「ことば」によって墮ちる。神のことばを借りれば、人を「いつわりの策略で／墮落させることは」「力づくで破滅させるよりもさらに悪しきこと」(第3巻90-91行)なのだ。堅く信仰に立つもの業として「武力」よりも「説得」が「より崇高な」価値をもつとされたのはちょうど対照的な図式がここで神によって、サタンを示す表現として呈示されていることになる。

ミルトンがサタンを「キリスト教的英雄」のパロディとして描いていることは明瞭であろう。

¹⁶ ‘Satan’s Sonnet’, *Milton Quarter*

IV

「武力」よりも「説得力」を「キリスト教的英雄」に顕著な特質とする考え方は、『楽園の喪失』第9巻の ‘...argument / Not less but more heroic than the wrath / Of stern Achilles’ (ll. 13-14)に連なるものといえる。そして、それは ‘...the better fortitude / Of patience and heroic martyrdom / Unsung’ (ll. 31-33)なのだ。

しかし、この主題は『楽園の喪失』という作品自体の中においては十分に描き尽されているとはいいがたい面もある。そして、この後に続く『楽園の回復』、『闘技士サムソン』において、このテーマはその完成を見ることになる、と述べて良いだろう。

『楽園の回復』においては、キリストがサタンの「説得の語調」をいかに切り返して信仰を深めていくかが描かれている。二人の間の戦いが「ことば」の戦いであることは、「力ではだめだ。詐欺ごまかしを巧く／隠し、罫を巧く編んだがいい。(第1巻96-97行)」というサタン自身のことばが示している。¹⁷

『楽園の喪失』における御子とサタンの対決に「ことば」が介在しなかったことは既に述べた。しかも戦いは御子の圧倒的な「武力」によって殆ど一瞬にして勝敗が決まった。御子は「力ですべてを量」る敵とは「力あらず以外は」しなかった。つまり、『楽園の喪失』ではなされなかった、御子による「より英雄的な」「より崇高な」戦いは言わばもちこされた形で、『楽園の回復』のテーマになっているといえよう。

アブディエルによって試みられたことばの戦いは神からは義とされたが、当のサタンが力でしかすべてを量ることができなかったために明確な決着を見ることなく終わった。しかし、『楽園の回復』に登場するサタンは御子の武力のすさまじさを知り、人類の父祖を墮落させて「いつもの策略」に味をしめている。「かつて巧くいった道じゃ今度とて巧くいくであろうよ。」(第1巻104-105)と言いつつ彼は「蛇の／詭計を腰に帯びて、ゆう然としてうち進む。」(119-120)「武力」では負けても「説得力」では負けないと言わんばかりの勢いだ。このように、策略をおのが武器として御子に挑んだサタンではあるが、ついにその目的を達することはできなかった。彼は「説得」の戦いにおいても圧倒的な敗北を喫して、「驚愕に撃たれて落ち」る。(第4巻563行) かつてフェアファックスやクロムウ

¹⁷新井明訳『ミルトン 楽園の回復・闘技士サムソン』(大修館書店、1982)から採用。以下『楽園の回復』、『闘技士サムソン』の訳はすべてこの書による。『楽園の喪失』の場合と同様引用の行数は同訳書の行数を示す。

エルに対して勧告された「武力以上に英雄的な」戦いはここに到って成就されたという言い方もできるのではないだろうか。

同様の思考様式は『闘技士サムソン』の中にも見出せる。神から見棄てられたと思い悩むサムソンの前に三人の誘惑者があらわれる。彼らとの「ことば」の戦いを通して主人公は信仰をとり戻していく。そして、「内に感ずる…^{うながし}衝動」(1381-1382)につき動かされて出かけ、ガザの都を崩壊させ自らの命を失う。ここで注意しておきたいのは、信仰を取り戻す以前に既に「武力」はサムソンに備わっているということだ。それは「さもなければこの不思議な力が／この^{かみのけ}頭髮に、まだ残っているのは、なぜじゃ」(586-587行)というマノアのことばから明らかになる。しかし、内的に信仰を回復する以前のサムソンはその力を使って我身を自由にしようとはしない。誘惑者達との言わば「説得合戦」に勝ち、確固とした信仰にたつてこそ「武力」を行使して勝利をもたらすことになる。そして自分自身の命をも失う主人公の生き方は、『樂園の喪失』第9巻で詠われた‘the better fortitude / Of patience and heroic martyrdom’の一つの典型と言えるのではないだろうか。

註で言及されなかった参考文献

1. Eds. Woodhouse, A. S. P. and Bush, Douglas, *A Variorum Commentary on the Poem of John Milton*, vol. II (part II): ‘The Minor English Poems’, New York: 1972.
2. Prince, F. T. *The Italian Element in Milton’s Verse*, Oxford: 1954.
3. Harding, Davis P. *The Club of Hercules*. The University of Illinois Press, 1962.
4. Patrides, C. A. *Milton and the Christian Tradition*. Oxford University Press, 1966.
5. Stull, William L. ‘Sacred Sonnets in Three Styles’, *Studies in Philology*, vol. L XXIX (1982), No. 1.
6. 新井明『ミルトンの世界—叙事詩性の軌跡』研究社出版、1980.
拙論「ミルトンの英雄観—その2—」『東京成徳短期大学紀要』第12号、1979。